

文字摺通信

第 72 号

2024年 9月15日

発行:文字摺歴史文化社

～古代・近世・近現代～

名字・氏名・姓名

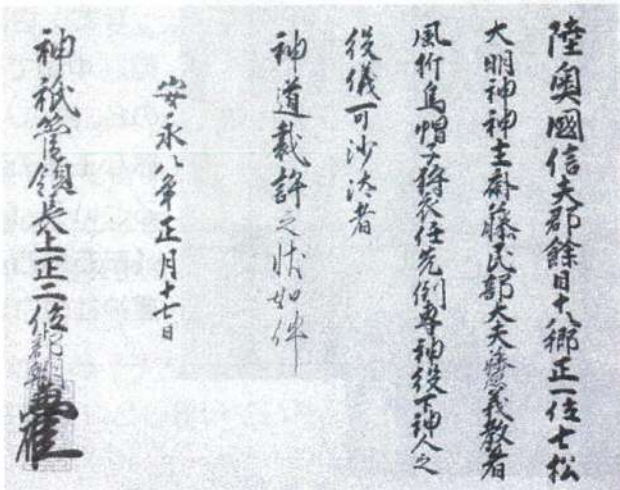
映画「男はつらいよ」で寅さんは「姓は車、名は寅次郎、人呼んでフーテンの寅と発します」と名乗ります。この場合の姓は名字のこと。野末陳平のベストセラー『姓名判断』（昭和 42 年カッパブックス）の姓名も同様です。しかし、自動車免許証もマイナンバーカードも保険証も、“住所・氏名”とあります。“住所・姓名”は使いませんが、氏名の“氏”も姓名の“姓”も名字のこと、ファミリーネーム（家の名称）を意味します。



元高校日本史教員の私としては、古代史の授業で“氏姓制度”では、“氏（うじ）”は蘇我氏や物部氏などのように血縁を中心に構成された擬制的同族集団で、“姓（かばね）”は“臣（おみ）や連（むらじ）”などのように氏の家柄や地位を示す称号」と説明していました。近代以前においては、藤原や源・平などの氏（うじ）と個人名の間には、「ふじわらのみちなが」「みなもとのよりとも」のように「の」を入れて呼称としていました。

名字は、古代末から中世にかけて、富裕層が開墾した田に名をつけて名田（みょうでん）とし、それが地名となり、その土地を手に入れた在地領主がその地名を家名としたことによる。苗を漢和辞典でひくと、①植物の生えたばかりのもの、②すえの血筋。遠い子孫、と出ている。苗の音読みは漢音で「びょう」、呉音で「みょう」である。その熟語に「苗胤（びょういん）」＝末の血筋、遠い子孫、「苗字（みょうじ）」＝その家の名、がある。江戸時代には名字も苗字も同義語として使われるが、もともとは「名字」はその家が所在した場所から、「苗字」は一族の血筋からきた家名を示すものではないかと思われます。豊田武著『苗字の歴史』（中公新書）で著者は「はじめに」で「なお『苗字』は『名字』とも書くし、中世ではいっばんに『名字』が使われているが、普通には『苗字』の方が親しまれているので、書名を『苗字の歴史』とした」とありますが、苗字の方が親しまれているのでしょうか。『新明解国語辞典』（三省堂）では「みょうじ【名字】・【苗字】」としており、『広辞苑』（第二版）では「みょうじ【名字】①姓、②氏から出た家の名」とあり、次の項に「みょうじ【苗字・苗氏】（「苗」は「苗裔びょうえい」の意）名字に同じ」とあります。

右の史料は安永8年(1779)に吉田神社ト部家が陸奥国信夫郡余目郷七松大明神(東屋沼神社)神主「斎藤民部大夫藤原義教」に給した神道裁許状です。受領した神主は「斎藤」が苗字、「民部大夫」が通称、「藤原」が氏名(古代のう



※編集後記兼近況報告兼私憤公憤

☆コロナに罹って以来、外出をすることも少なくなり、それに反比例して寝転がって小説を読む時間が増えました。本来の私に戻った感じです。小説も新規開拓が面倒になり、書庫に入って好きな作家の小説を読み返しています。まずは北方謙三のハードボイルド、約束の街全6巻。北方のシリーズ物は副題の恰好良さも楽しいです。『約束の街』は1話「遠く空は晴れても」。2話「たとえ朝が来ても」。3話「冬に光は満ちれど」。4話「死がやさしく笑っても」。5話「いつか海に消え行く」。6話「されど君は微笑む」。以上です。次に藤沢周平を読んでいます。剣豪もの『用心棒日月抄』や世話物『海鳴り』も良いですね。ローテーションでは次は大沢在昌、何度目かの『新宿鮫』(全12巻)にまた挑みます。寝っ転がって文庫本。最高です。

☆第65号で日本年寄党党首守谷早苗は為替相場のことを考えていることを書きました。ちょっとわかりずらかったので、もう一度書きます。円という商品の値段の表示を1ドルを基準に表示するのではなく、100円を基準に表示すべきという主旨です。つまり1ドル150円が1ドル160円になると円安という説明ではなく、100円66.7セントが100円62.5セントとなりました。円が安くなりました。これだとわかりやすいと思います。

来たるべき秋の総選挙において、わが日本年寄党が衆議院第一党になったら、私守谷早苗は日本国総理大臣となります(党員数現在1名ですが・・・)。

その暁には、円＝ドルの為替相場の表示は円を基準にし、金融問題を国民の皆様にも身近なわかりやすく伝える努力をすることを公約します。

☆学習センター(公民館)の寿大学の歴史講座からの依頼で講師を務めることがあります。テーマはなるべく要望に応えるようにしています。一昨年はNHK大河ドラマ関連で「鎌倉殿の13人、その頃ふくしまは」。昨年は「どうする家康、そのころふくしまは」というタイトルで話をするのが何度かありました。今年は「光る君へ、そのころふくしまは」で話をしてほしい、との要望がありましたが、近世史が専門の私ですので、古代史まで話をするのはちょっと無責任と思い、また紫式部とふくしまの関連の話もできないのでお断りしました。その代わりといっっては何ですが、20年ぶりで新札がでるということで、「渋沢栄一とふくしま」をテーマに話をしています。いろいろ調べると、直接、間接につながりはいろいろあるようです。ただし、この「ふくしま」は「福島市」ではなく、「福島県」です。

☆新しい日本銀行券が発行されました。5000円札は津田梅子女史です。女性の肖像が日本銀行券の顔になったのは、前回、平成16年11月に発行された樋口一葉女史からです。それにしても千円札、五千円札、一万円札の3種ある紙幣のうち、女性はもっとも使用されることの少ない五千円札に限られているのは、まだまだ日本が男性社会であることの証明でもあります。今年度発行の一万円札(渋沢栄一)は18億3千万枚。千円札(北里柴三郎)は9億1千万枚であるのに対して、五千円札(津田梅子)は2億1千万枚。枚数では全体の7%に過ぎません。女性が一万円札の肖像になるのはいつのことでしょうか？

『～ふくしまの歴史と文化財～文字摺通信』第72号 令和6年9月15日(日)発行

発行：文字摺歴史文化社 代表：守谷 早苗

〒330-0130 福島県いわき市東三三三-5 守谷 早苗

E-mail: mj.ya@shibuc.co.jp TEL: 090-4314-9525